

太宰府の文化財

393

水城東門跡を通った日田街道と松並木

664年、太宰府地域防衛のため水城が築造され、東西に造られた門はその後、大宰府の出入口となりました。西門には筑紫館と大宰府をつなぐ官道（公の道路）が、東門には博多と大宰府をつなぐ官道が整備されます。東門が門としての機能を失い切通の状態となったあとも、官道とほぼ同じ位置に江戸時代には日田街道が、明治時代以降は国道、県

道、市道が整備され、人々の往来を支えてきました。今回は、江戸時代に整備された日田街道に目を向けてみたいと思います。

日田街道とは、徳川幕府の天領（幕府の直轄地）である大分県日田市に置かれた九州統治の拠点である郡代役所の永山布政所を起点に、小倉城（豊前）、中津城（豊前）、福岡城（筑前）、久留米城（筑後）、熊本城（肥

後）と岡城（豊後）、大分城（豊後）の7つの城へ向かう6つの街道の総称です。その経路には太宰府天満宮や英彦山（福岡県添田町）なども含まれ、天領と各国を結ぶ道と信仰の道の2つの用途を持つ街道として整備されました。

太宰府を通った日田街道は筑前宰府路や福岡城路などと呼ばれ、日田と太宰府天満宮、博多・福岡城を結ぶ約61kmの街道で、西鉄二日市駅の東側、鷺田川沿いを通り、通古賀を抜け、関屋に至り、参詣道として太宰府天満宮へ向かう道と水城東門跡を通り博多・福岡城へ向かう道の二手に分かれます。



大正4年～昭和初期の東門跡の様子（絵葉書）



水城館前の広場に植えたクロマツ



水城館周辺整備地の植栽配置図

天領と福岡城を結び多くのの人々や物資が往来した街道沿いには、往来する人々に木陰を与え、道を風雨から守るために松が植えられ、松並木となりました。江戸時代に描かれた筑前名勝画譜などの絵図には東門跡を通る日田街道沿いの松並木が描かれています。この松並木は明治時代になっても数本の老松が残っていて、明治42（1909）年8月の暴風により、その中の1本の根元に亀裂が入り危険なことから、福岡県知事あてに、伐採のために払い下げを願う文書も出されています。また、大正4（1915）年から昭和初期の東門跡周辺の様子を写した絵葉書にも松並木が見え、日田街道の面影を見ることが出来ます。

現在、東門跡周辺では史跡整備が進み、土塁の復元とともに水城跡散策の休憩所となる水城館や、古代の官道を明示するなど水城跡の歴史を伝える整備を行っています。今では日田街道沿いの松並木は姿を消してしまいましたが、多くの人々が往来した道の歴史を伝えるため、整備地の一角に1本のクロマツの若木を植えています。

文化財課 沖田 正大